

第97号 通巻17巻第6号 1998年3月31日 発行

守山市立埋蔵文化財センター 2077-585-4397

#### ☆はじめに

今年の冬は例年以上に暖かく、 雪も少なかったため比較的調査も 行いやすかったようです。朝晩の 冷え込みも徐々に和らぎ、春の息 吹がいたるところで感じられるよ うになりました。乙貞も今年度最 後の発行となり、総括としてお送 りします。

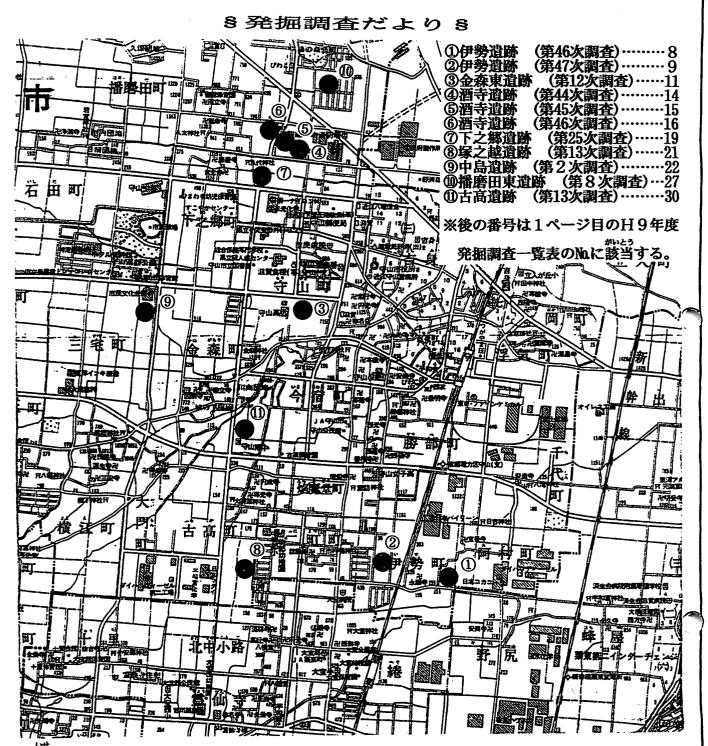
### ☆発掘調査一覧表

右に掲載している表は、今回乙 貞で扱った調査ならびに、今年度 行われた調査の一覧表です。今年 度は総数39の発掘調査が行われま した。なお、今回の乙貞で掲載し ている発掘調査の調査地・調査期 間・面積などはこの表で確認して ください。また、いちばん右側の 掲載号は、乙貞の第何号で扱った かを表していますので、皆さん方 も御一緒に今一度振り返ってみて ください。

No.	遺跡名(監験)	<b>割</b> 査 地	調表期間	###/###		858	掏载导
1	石田三宅遺跡	荷河外路4958部 8	H9 7/1~9/11	1300/1300ជ	<b>dist</b> e	小島	94
2	今市遺跡	<b>建</b> 1237-4•5#	H9 4/21~5/7	315/891a	排的機	岩崎	_
3	伊勢直路(第40太陽克)	PMTER3NE9	ii9 4/24~6/13	323/1148ਈ	胡胜全峰	中村	93
4	伊劳政権(第41・42大政策)	<b>0597815</b> 48-1•2	119 5/16-6/26	50/368d	似胜轮	小島	93
5	伊勢推聯(第43次開在)	<b>PE</b> F114K4 <b>80</b>	H9 8/4~8/26	374/745d		川畑	94
6	伊勢遺跡(第44次調査)	0 <b>9</b> 96R14 <b>5</b> E7	H9 10/8~11/6	220/768a	知论额	中村	95
7	伊勢道路(第45次開放)	<b>78477781</b> 10814KM	H9 11/22~12/24	433/500d		伴野	96
8	伊秀滋藤 (第46末興金)	伊勢可予核中間80億地	H10 1/22~3/4	100/100d		伴野	97
9	伊勢直勝(第47次開走)	伊料用1396、 143974地	III0 3/13~	60/2200₫	1111	畑本	97
10	<b>范克克城直路(第2次副</b> 查)	## <b>#</b> #################################	119 6/2~7/15	560/1234d	排除金額	川畑	94
11	全章集團第(第12末開查)	やが月子へ都が可・子太日・子太和軍	118 10/22~( <b>FEE</b> )	8000/8000d	<b>以再基理</b>	小出	93~ <del>9</del> 7
12	全直索直路(第13次開查)	全部77大上2635-1420 包	119 6/2~6/7	100/840d		大岡	93
13	西寺道路(第43次異在)	<b>福田中平和2</b> 3113-240	li9 5/29~6/14	300/980a	期的	小島	93
14	西考准券(第44次商金)	重點円字平成0里3021套地	II10 2/18~19	107/750d	规键	在十本	97
15	西寺政路(第45次開在)	量銀四字字成の里3041番地	H10 2/17~3/6	177/674d	磁料规	中村	97
16	養養遺緣(第46末間查)	<b>第66</b> 43102 <b>8</b> 8	II10 2/23~3/4	204/530d	蓝树树硷	小島	97
17	下長遺跡(第17太副章)	古科777750 <b>#地</b>	II810/17~H101/30	E0008\0008	india	岩崎	93~95
18	F長雅勝(第18末期在)	古阿571-24地	li9 4/21~9/18	1600/1600d	Lite	作野	93-94
19	下之事間第(数25次期数)	F2\$F19115217-280 8	H9 9/29~(####)	2322/23224	<b>EUS</b> ALA	川畑	95~97
20	單之趙嘉斯(第11次副章)	枯河洋銀193個 島	ii7 10/24~ii9 4/8	18134/181434	ente	在4本	92
21	學之體重數(第13次開查)	古都字太师207番地 自	119 4/23-H10 1/24	6521/6521d	erei	畑本	93~97
22	中岛政語(第2末開音)	三四四百四2246年 8	II10 3/4~(###)	700/400001	焊链	岩崎	97
23	是聚苯酚(第6次聚烷)	A\$F11777##	H9 11/6~11/11	144/870ਵੀ		大岡	95
24	長塚瀬路(第7太韓査)	<b>₩77E/El-1769-488</b>	li9 11/18~11/19	97/413d	规键	大岡	-
25	二/唯一概念第(第2928章)	906TE567-6##	li9 4/24~4/28	127/148d		小島	93
26	警疫日東遊鳴(第7次興立)	<b>基层</b> 四寸字音第130-14地	H9 4/23~6/27	600/1530d	<b>共社省建</b>	蘇原	93
27	(古風太8後) 都京京記書館	最新可字型前252-14地	II10 3/2~3/6	100/1440d	ener	畑本	97
28	二可数双格(第9大副金)	二和79/61408地	H9 9/25~11/20	1342/1342d	enti	小島	95
29	古典遺跡(第12大幕章)	4回90和468-160	ii9 4/21~5/23	120/573d	糊雜	川畑	93
30	古典理論(第13次開發)	<b>今四字叫牌468-7-8#</b>	II10 3/4~3/6	123/370d	規約	大岡	97
31	古高級政務(第9次開査)	\$ <b>8</b> \$17\$\$227-8 <b>\$%</b>	119 4/25~5/16	301/301d	<b>PBA</b> Q	大岡	93
32	吉身育遺跡(第3次開放)	QAN71:84230-188 B	li9. 11/25~lī10 1/17	486/1780d	期金额	中村	96
33	首身 <b>北京時</b> (第16次開音)	##P788410-10##	119 6/26-8/20	77/200d		大岡	94-96
34	古身主義等(第17大副章)	BIP1759413-140 B	H9 8/18~12/26	1569/1569a	ener	£4#	95-96
35	古身而且數(第82次異立)	914TB9141314-140	li9 5/19	118/326d		在4本	93
36	音角波響(第83次開音)	引河神祇[1326-18地	li9 6/16~7/4	330/3304	2024	在4本	94
37	音角西道路(第84次副章)	中的学生39年150-140	li9 7/7~7/18	129/915㎡	B <b>EAS</b>	中村	94
38	音角点显像(第85次重查)	和月7七/在162-248	H9 7/23~H10 1/14	2577/2577d	10518	蘇原	94~96
39	古皇所政治(第86太明章)	905TB9EE94146-7##	119 8/6~8/21	520/1000al	SEAM.	中村	04



「乙貞」は服部遺跡の調査で出土した銅印に刻まれていた文字で、奈良時代末頃のものと思われます。大きさは約3.3cm ×3.3cm ,高さ約4.2cm ,重さ約75g です。この銅印は公印として使用されたものではなく、個人印として使用されたものと考えられます。



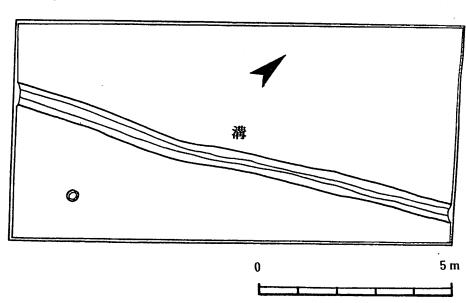
# ①伊勢遺跡(第46次調査)

伊勢町字東中浦において、国庫補助事業の一環で確認調査を実施しました。調査地は、平成4年度に実施した21次調査の土置き場として使用された地点にあたります。確認調査面積は約100 ㎡です。確認調査では平面検出にとどめ、遺構の広がりについて確認することを目的としました。その結果、竪穴住常まて棟と柱穴・土壙などを検出しました。竪穴住居は全て方形で、一辺4~6m以上を測ります。時期については不明ですが、もっとも新しい住居平面から古墳時代前期の土器が出土していることから、それ以前の住居と推定されます。柱穴は黒褐色のものと灰色のものの2種に大別でき、後者は中世の柱穴

と推測されます。今回の調査では、厳密に遺構の年代を決めることはできませんでしたが、21次調査地 点から引き続いて竪穴住居が北西側に広がっていることが確認できました。 (伴野)

#### ②伊勢遺跡(第47次調査)

既に開発地区全体で試掘調査を 実施し、遺構が確認された部分に ついて今回調査を実施しました。 遺構は黒褐色土をベースにして、 東西方向で直線的に走る溝1条と ピット1穴を確認しました。溝は 約50cmの幅で、断面は逆台形にな ります。深さは東寄りで24cm、西 端で約35cmを測り、西に向かって 深くなっています。遺物は甕と小



片をあわせて数点が出土しただけですが、時期は古墳時代後期と考えられます。

(畑本)

10m

### ③金森東遺跡(第12次調査)

現在、金森東遺跡では保留地部分の調査を行っています。その中で今回は、溝と竪穴住居を検出した調査区についてお話します。まず、並行して走る2本の溝ですが、土のたまり方を確認したところ溝1の方が新しいことが分かりました。出土した土器から、時期は10~11世紀頃と考えられますが、2本の溝から出土した土器はそれほど時間の隔たりは感じられませんでした。また、この2本の溝は現在の地割りと並行して掘られていることから、条里制との関連が想定されます。条理とは古代の土地区画制度のことですが、今なおその様相を残しているとこ

ろも大変多く残っています。次に竪穴住居に移りますが

溝 2

5.2 ×5.6 mとやや東西の辺の方が長い方形プランの住居です。一部調査区の外へ広がっていますが、3本の主柱穴・周壁溝・貯蔵穴等で構成される一般的な住居です。また、中央やや西よりのくぼみのところには土が焼けた跡や炭が確認されていることから、炉のような施設があったことが想定されます。さて、この住居ですが、南辺中央やや西よりに貯蔵穴がありますが、この両脇に溝状の遺構が2本確認されました。貯蔵穴のまわりを板でかこっていたのでしょうか。貯蔵穴とは住居の中で物を蓄えたりす

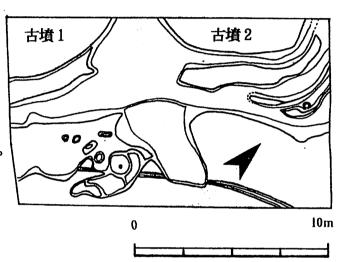
るのに利用されていたと考えられていますが、この施設の脇に溝状の遺構が確認されたのは今回の調査では初めてのことです。この2本の溝が、竪穴住居という大きな空間の中で"ここは物を蓄えるところ"という小さな空間を意味する区画溝の役割を果たしていたと考えられ、大変注目されます。 (小出)

### ④酒寺遺跡(第44次調査)

今回の酒寺遺跡の調査では、溝1条と数個のピットを検出しました。周辺の調査を合わせて考えても 今回調査の遺構の性格はよく分かりませんでした。溝の時期は、出土した土器より6世紀前半の年代が 与えられます。 (佐々木)

#### ⑤酒寺遺跡(第45次調査)

播磨田町字平成の里で、約177 ㎡を対象に発掘調査をしました。その結果、古墳2基と溝1条を検出しました。古墳の規模は古墳1が直径約7m、古墳2は直径約7.5 mを測ります。これらの古墳は幅3~5m、深さ50~60cmを測る周溝が巡っていました。時期は出土した土器から古墳時代後期と考えられます。周辺の調査でも、弥生時代中期~古墳時代前期にかけての方形周溝墓が見つかっており、この周辺が墓域として長く利用されていたことが分かります。



(中村)

#### ⑥酒寺遺跡(第46次調査)

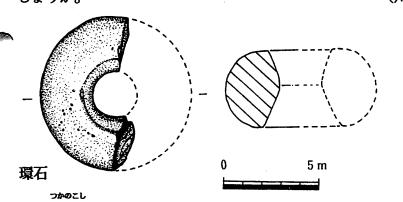
播磨田町字箱田で、約200 ㎡を発掘調査した結果、 古墳時代前期の土壌と中世の柱穴、土壌、溝を検出 しました。区画整理に伴う調査で、調査地の北側か ら古墳時代前期の竪穴住居群や中世の掘立柱建物な どが検出されていることから、今回検出した遺構も その広がりとしてとらえられます。 (小島)

# ⑦下之經遺跡(第25次調査)

現在調査を進めている下之郷遺跡から、右上図のような石器が見つかりました。一部は欠損していますが、復元すると直径 8 cm、厚さ 4 cmで、中央には直径2.4cm の穴があけられたドーナツ形の石器です。材料に使われた石の種類や原産地はまだ詳しく調べていませんが緑灰色で、やや軟らかい石を使っています。表面はていねいに磨き上げられ、中央の穴は石のドリルのような道具で双方からあけられたものと思われます。この種の石器に類似する物には、「環状石斧」と呼ばれるものがあります。「環状石斧」

は周縁部がとがっていて、この石器とは形態が違うため、今回発見された石器は、それとは区別して「環 石」と呼ぶ方が良いようです。「環石」は別名「棍棒頭石器」とも呼ばれ、広く東アジアの石器時代の 遺跡から見つかっています。「環状石斧」や「環石」の使われ方は、いずれも打撃用の武器として理解

されていて、戦いの最中にあっては、意気揚がる戦士たちのシンボルや指揮棒であったり、時には相手をぶん殴る道具であったのかもしれません。今回紹介した「環石」は、現在調査している環境の縁の部分で発見されたもので、想像力をたくましくすれば、環境の周辺でくりひろげられた戦いの遺品として理解されないでしょうか。 (川畑)



⑧塚之越遺跡(第13次調査)

健棒の諸形式 (ニューギニア)

1962年 日本考古学協会編 『日本考古学辞典』東京堂より転載

方形周溝墓は結果的にT-4の西端で検出した1基だけで全容を知ることができませんでしたが、この方形周溝墓は北側の隣接地で見つかっている方形周溝墓に続く弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられます。全体では南北方向に所在することがみられることから、さらに南に広がっていく可能性があります。

旧河道はこれまでの調査で確認されている続きをT-3で検出しました。ただ、灌漑用として見つかっていた3条の水路はここでは乱れ、水田跡も検出するには至りませんでした。ちょうど、このT-3で合流し、南側に向かって走る別の旧河道を確認しました。幅は約16mを測り、T-3南端よりもT-6からT-5にかけて深くなる傾向にあります。このあたりは地形的に尾根筋にあたり、この旧河道は尾根を分断して流れていることになり、今のところよく分かりませんが必要とする何らかの要因があったと考えられます。

掘立柱建物は $T-1\sim T-5$ 、T-6、T-4の3カ所に分かれて、合計14棟を検出しましたが、このうち $T-1\sim T-5$ の建物群は、少し離れた地点でそれぞれ切合いがあって数回にわたり建替えられ

ていました。時期は鎌倉時代後期と思われますが、この時期で市内で見つかっている遺跡をみると、溝で整然と区画された建物群の場合が多いことから、今回の建物群は少し様相が異なった建物群ではないかと考えられます。 (畑本)

なかじま

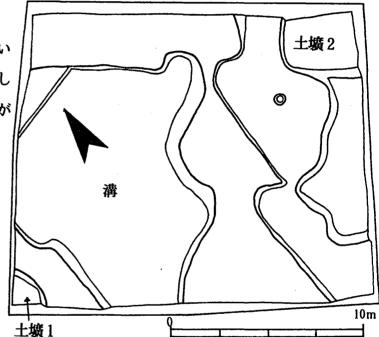
#### ⑨中島遺跡 (第2次調査)

平成10年3月から守山市民ホールの南西側の隣接地で当地一帯に分布する中島遺跡の発掘調査を開始 しました。調査は大学建設に先立つもので、この3月から7月までの予定で、建物建築部分である約3200 ㎡の面積を調査する予定です。

現在の所、溝とピットを検出しています。溝は幅約4m、深さ40cmほどの規模ですが、縄文時代晩期の土器、弥生時代前・中期の土器が多量に出土するほか、それに混じって打製石鏃や各種の石斧など石器も出土しています。 (岩崎)

# ⑩播磨田東遺跡(第8次調査)

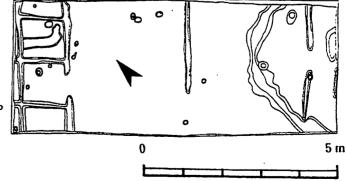
試掘調査によって遺構を確認した約85㎡について調査を実施し、溝1条と土壙2基を検出しました。溝は南北方向で調査区のほぼ中央で少し広がり、茶褐色粘土を埋土としていました。検出面からは土師器皿が出土していますが、この埋土からは壺や高坏が出土していて弥生時代後期の溝と考えられます。土壙1は西隅で検出し、灰黄色砂質粘土層で埋まっていて、中から黒色土器が出土し、13世紀後半から14世紀前半の時期と考えられます。土壙2は調査区の東側に段を



なして広がり、東端の一部が深くなっています。遺物は少ないため時期はよく分かりませんが、埋土が 土壙1と似ていることから、ほぼ同じ時期と考えられます。 (畑本)

## ①古高遺跡(第9次調査)

守山南中学校校庭の横を調査しました。調査区の西側では縦横にのびる溝が見つかりました。遺物は中世の土師器皿の破片が少量出土しています。 東側では緩やかにカーブを描く溝が見つかりました。過去に行われた周辺での調査で方形周溝墓が



見つかっていることからその可能性も考えられます。**適物は弥生時代後半**の高坏の破片が出土しています。 (大岡)

## ☆平成9年度 市内遺跡の発掘調査の成果と課題

平成9年度も市内各地で開発が行われ、それに伴う発掘調査も30件を越えています。それぞれの遺跡での成果は乙貞で掲載してきましたが、ここではまとめとして時代別に成果と課題について総括していきたいと思います。

#### 1. 縄文時代

今年度は、金森東遺跡、吉身西遺跡、下長遺跡の発掘調査で縄文時代の遺物が発見されました。縄文時代の遺構については、これ以前の調査でも指摘されていますが、生活面の認定にしる、遺構の範囲にしる明確におさえることが非常に難しいです。今年度発見された縄文時代の遺物も、遺構との関係で正確な理解が得られたものは少ないです。吉身西遺跡では、遺構を検出した面(基盤層)の中から炭化物に混じって晩期の土器が検出されました。また金森東遺跡では、周辺で縄文時代の遺構、遺物ともに確認されていない地点で、新しい時代の溝跡から石刀が1点のみ発見されました。このような事例は、他の地点でも多く見られます。同様な例で調査された塚之越遺跡(第11次)では、現在出土遺物の検討がされています。この地点でも、明確な遺構はとらえにくい状況でしたが、出土した石器や土器の分類と動布状態から当時(縄文中期末)の石器製作の様子や空間的な土地利用のあり方が見直されています。今年度の調査で唯一、遺構が捉えられたのが横江遺跡です。広い範囲を試掘し、遺構の確認にあたった結果、谷地形に挟まれた緩やかな微高地が存在し、その上で土壌状の遺構が数カ所で確認され、中期末の土器や石器が見つかっています。この地点は、先の塚之越遺跡の地点とは700 mほど離れてはいますが、出土した遺物の時期や型式には共通するものをもつため、縄文人の生活領域や変遷を探ることが今後の課題となります。

#### 2. 弥生時代

本年度も市内の弥生時代の遺跡で重要な成果がありました。昨年の10月から下之郷町で道路建設に先立つ発掘調査によって、弥生時代中期の環濠集落遺跡である下之郷遺跡の実態が明らかになりつつあります。今回の調査では6条の溝が検出され、土器・石器・木製品などが出土しています。その結果、長径420 m、短径370 mを測る環濠集落であることが判明しました。濠の内側では棚や掘立柱建物などが見つかっていますが、集落の内側については今後の調査によって明らかにされると思います。これまでの調査によって、濠は計9条ということになります。これらの溝から出土する遺物は、外側にむかって少なくなる傾向があります。そのうち、3条については環濠として集落の周りを巡っているものとみられます。その他の溝は、集落の東側のやや高い地域を中心に弧状にのびていると考えられます。大規模な集落遺跡の範囲がほぼ推定されるようになった点が重要な成果といえますが、課題も多いです。例えば土器の型式から少なくとも3時期ほどの時間幅が想定されますが、集落内部の時期別の変遷や濠の埋撃設時期から想定される同時性の問題など、厳密な検討が必要です。そのためにも、これまでの調査成果

を総合して検証する必要があります。過去の調査成果と今回の成果を相互に比較検討することは、どの 遺跡についても常におこなっていかなければなりません。

弥生時代中期末の方形周溝墓では、焰魔堂城遺跡においてやや変わった墓がみつかりました。この周溝墓は西辺の溝の中央に陸橋部があります。弥生時代中期末の二ノ畦・横枕遺跡でもこのような方形周溝墓がみつかっていますが、古墳時代初頭に出現する前方後方型周溝墓の祖形の可能性も考えられています。しかし、周溝墓と前方後方型周溝墓の形態差は大きく、今後の資料増加が待たれます。

下長遺跡では弥生時代後期末の大型独立棟持柱付建物が検出されました。市内では伊勢遺跡以外で初めての例です。1間×3間で中心の柱がありません。柱は抜かれていて、埋め戻されています。1間×5間の伊勢遺跡のものと形態的に差があり、古墳時代になると2間×3間の建物が多くなることから、比較的新しい要素を持っていると言えます。旧境川沿いの遺跡に大型建物が集中していること、環濠をもたない遺跡に出現する点で、弥生時代から古墳時代への過渡期の特徴を示しているといえます。大型建物も、それ自身の意義を追求していくことも大事ですが、今後は集落全体の中での位置や構成、あるいは遺跡群の中での大型建物が出現する遺跡の特徴について検討していく必要があります。

いずれにしても調査次数が増加する中で、各遺跡においてこれまでの調査成果を再点検し整理しなが ら、今後の調査に生かしていく作業が急務であることを痛感しています。

#### 3. 古墳時代

そのことによって、それまで知られていなかった遺跡の新たな知見であったり、遺跡の実態解明を飛く 躍的に深化させる資料となりました。

例えば、下長遺跡の場合、これまで平成元年以降実施されてきた16次の調査によって、古墳時代前期の拠点集落と考えられてきましたが、古墳時代前期の遺物と考えられる儀杖(翳状木製品)や準構造船部片の出土は、下長遺跡の解明の大きな手がかりとなりました。儀杖は首長の持ち物で、頭部に装飾されている「組帯文」によって中央との関わり、相当の権力をもった人物であったことが予想されます。このことは他の集落に比べ、優位性を証明する遺物と考えられます。一方の準構造船部片の出土については、船底部と舷側板を桜皮で結合した唯一の出土例として、古墳時代の造船技術を知る大きな手掛かりである他、拠点集落・下長遺跡の成り立ちを考える上でも分かりやすい遺物です。草津市栗東町の境界近くに位置する下長遺跡がなぜ、拠点集落として存在していたのか。これまではこの点を推論することができませんでしたが、準構造船部片の出土によって、琵琶湖を利した水運による物流を直接的な要因とする考え方も可能だと思われます。

つまり、陸上交通網の未成熟な時代、大量輸送が可能な湖上交通は物流にとって不可欠なものでした。 そして湖上交通で運ばれた物資を陸揚げする場所の一つがこの下長遺跡ではなかったかと考えられるのです。物資の集積地として機能し、それを掌握する豪族は中央の権力と深く結びついた人物であり、出土した儀杖を使用した祭祀を行っていたのではないかと、今回出土した2点の遺物を結びつけることができます。

このように、これまで単に「下長遺跡は古墳時代前期の拠点集落」として理解してきたわけですが、どのようにして形成されたかという遺跡の成り立ちも発掘調査の成果によって推測できる段階にきているといえます。勿論、このような遺跡は全体から見れば数少ないのですが、将来の指針としても価値のある埋蔵文化財であり、詳しければ詳しいほどその評価は高まるでしょう。

#### 4. 奈良時代以降

奈良時代以降では、特に平安時代後期から中世にかけての遺構を多く検出しました。このうち、伊勢遺跡(第43次)では遺跡が立地する微高地の南端から平安時代後期の掘立柱建物群が検出されました。中には8間(7間)×5間規模の庇付きと考えられる建物もあり、有力農民層の住居など集落の中心的な建物の可能性が考えられます。石田三宅遺跡では以前の調査で、平安時代後期の溝で囲まれた有力農民層の屋敷地が検出されていますが、その南側200 mの地点から東西60m程の小規模の集落が見つかりました。有力者の屋敷地の周りに小規模な集落(建物群)が広がっている、当時の集落形態の一例といえるでしょう。

中世の遺構は塚之越遺跡、吉身海道遺跡などで鎌倉時代後期の掘立柱建物などを検出したほか、二町 鏡遺跡では鎌倉時代後期から室町時代前期にかけての溝に囲まれた方形屋敷地が見つかりました。二町 鏡遺跡ではこれまでの調査で、ほぼ一町半四方の範囲を幅2~3mの溝で整然と屋敷地を区画割りしていると考えられます。屋敷地内にはそれぞれ、大小の建物群と井戸があったとみられ、市内横江遺跡のような集落景観であったことが想定されます。伊勢遺跡(第45次)では室町時代の屋敷跡が検出されました。これまでの調査成果から、二町鏡遺跡同様、溝で屋敷地を区画割りする集落と考えられ、少なくともこの時期には集村化されたことがうかがえます。このほか同じ伊勢遺跡(第40次)からは多量の牛骨が出土した鎌倉時代後期~室町時代前期にかけての川跡が見つかりました。牛骨は解体後に廃棄されたと考えられ、その数は第28次調査の成果と合わせると6頭以上にのぼるとみられます。こうした類例は他にあまりなく、食用の慣習の有無や皮革職能集団の存在などを含めて、中世社会を考えるうえで注目される資料といえるでしょう。

(編集後記) 今年度は他府県の遺跡でも大きな発見があり、明るい話題が多くありました。でも世間を 見渡してみると、景気不安や大蔵省の汚職など楽しくない話題ばかりでした。これらの暗い話題が来年 度には全てきれいに片づいてくれればいいのですが。 (編集者一同)